

## 子育て支援の葛藤における保育士の意識構造 —保育士の語りの質的分析から—

Day Nursery Teachers' Consciousness Structure in relation to Conflicts in Child-rearing Support: Based on the Qualitative Analysis of Narratives with Day Nursery Teachers

亀崎 美沙子

Misako KAMEZAKI

### 要 旨

本研究の目的は、子育て支援の葛藤における保育士の意識構造を明らかにすることである。そのために、3名の保育士に半構造化インタビューを実施し、SCATにより語りの質的分析を行った。

その結果、第1に、保育士の子育て支援の背後には専門職倫理意識と母親規範意識という、2つの異なる意識があることが明らかとなった。第2に、本研究の分析対象となった葛藤事例は、いずれも子どもと保護者、それぞれに対する倫理的責任の対立から生じる倫理的ジレンマであり、その解決のためには保育士の専門職倫理の具体化が必要であることが示唆された。第3に、母親規範意識にもとづく子育て支援は、母親の子育てを困難化させるおそれがあることから、保育士自身がこれを自覚し専門職倫理にもとづき実践を行うことや、そのための倫理教育が必要であると考えられた。

本研究結果は、少数データの質的分析によるものであり、データの追加によって新たな知見が見出される可能性がある。この点が本研究の限界である。今後の課題として、量的調査による詳細なデータ分析が必要である。

### I. 問題と目的

本研究の目的は、子育て支援の葛藤における保育士の意識構造を明らかにすることである。

保育士には、児童福祉法第18条の4において、子どもの保育と保護者に対する保育に関する指導<sup>注1)</sup>（以下、子育て支援）という2つの職務が規定されている。子育て支援とは、児童の権利に関する条約や児童福祉法を踏まえるならば、保護者への働きかけを通して、子どもの最善の利益を確保する営みであると考えられる<sup>1)</sup>。子どもの最善の利益は、児童の権利に関する条約第3条に示される理念規定であり、児童福祉法や保育所保育指針（以下、保育指針）、幼保連携型認定こども園教育・保育要

領（以下、教育・保育要領）第1章総則にも、保育や子育て支援の基本原則あるいは目標として位置づけられている。また、児童の権利に関する条約は、子どもの発達における親や家族、家庭環境を重視しており、締約国に親が養育責任を遂行できるよう援助することを求めている。このことは児童福祉法第3条の2にも、同様に規定されている。

つまり、保育と子育て支援という2つの職務はいずれも、子どもの最善の利益をめざして行うものであると考えられる。言い換えれば、保育士は子どもへの直接的なケアと保護者に対する子育て支援という2側面から、子どもの最善の利益の実現をめざす専門職であると言える。しかし、このような職務構造は、保育士の行う子育て支援に独自性を与える一方で、子育て支援の実践において、葛藤をもたらすこととなる。

前述の通り、保育も子育て支援も、理念上は子どもの最善の利益をめざすものであり、相反するものではない。しかし、実際の対応においては、子どもと保護者のいずれを優先すべきかに悩み、“子どものために”“保護者のために”という思いの間で板挟みとなりやすい<sup>2) 3)</sup>。本研究では、このように、保育と子育て支援という職務の二重性を有する保育士が、“子どものために”“保護者のために”という思いの間で、対応の優先順位やその妥当性の判断について迷うことを、葛藤ととらえることとする。

保育士の職務の二重性を踏まえると、このような葛藤は子育て支援の実践において、避けることのできない問題である。葛藤状況において、保護者に対する支援を重視すれば、子どもよりも保護者の利益が優先される可能性が高まると考えられる。しかし、子育て支援の目的を踏まえると、葛藤状況において、いかにして子どもの最善の利益を保障するのかが問題となる。現状では、子育て支援に生じる葛藤の解決のしくみが構築されていないことから、この点に関する検討が必要である。木曾<sup>4)</sup>は、発達障害傾向児の保護者に対する支援において、保育士が子どもの発達障害への気づきを「促す役割」と、保護者を「支える役割」の間で葛藤を抱えることを明らかにし、その解決のためには「促す役割」を担当保育士から切り離すことが必要であると指摘している。これに対して、本研究の焦点化する葛藤は、法定業務の二重性による構造的な問題であり、これとは異なる解決のしくみが必要である。

これまでの研究では、職務の二重性に伴う子育て支援の葛藤について、その実態と構造を探索的に検討するために、3つの事例研究を行った<sup>5-7)</sup>。その結果、①葛藤は保護者のニーズや養育態度が子どもの利益に反すると感じられる場合に生じること、②保護者のもつ支援ニーズへの気づきや自身の職務範囲の限界に対する認識が葛藤を低減させること、③子どもの最善の利益に対する長期的・包括的な視点が葛藤の解消につながることを明らかにした。しかし、これらの研究では葛藤が保育士のどのような意識によって生じ、また保育士はどのような意識にもとづき葛藤に対応しているのか、その意識構造については十分に検討することができなかった。

そこで本研究では、葛藤の解決にむけて、3名の保育士<sup>注2)</sup>の語りの質的分析から、子育て支援の葛藤における保育士の意識構造を明らかにすることを目的とする。そのために、まず各事例における葛藤の構造を明らかにする。その上で、葛藤の背後にある保育士の意識構造について検討を行うこととする。このことは、子育て支援において、子どもの最善の利益を確保するための手がかりとなると考える。

## II. 方法

### 1. 対象と方法

#### (1) 調査対象

保育と子育て支援を同時に担う保育士として、特定のクラスを担当しており、5年以上の保育経験を有する保育士を調査対象とした。後者の条件を設定した理由は、第1に、これまでの新任期の保育士を対象とした調査の経験

から、経験の浅い保育士は複数担任のクラスに配属される傾向にあり、保護者とのかかわりを任されていない可能性が想定されたことである。第2に、一定の経験を有する保育士は、葛藤に対する何らかの方策を見出している可能性があり、そうした事例を収集することで、葛藤の解決の手がかりを得たいと考えたからである。

調査対象者はすべて女性であり、調査の概要は表1の通りである。A保育士およびC保育士は、調査協力依頼を行った保育所の園長より、適任者として推薦のあった保育士である。また、公私立のバランスを考慮し、公立保育所の保育士であったB保育士に個別に調査協力依頼を行った。A保育士は乳児クラスの担任と主任を兼務しており、C保育士は幼稚園での勤務経験を有していた。

#### (2) 調査方法

各保育士に個別の半構造化インタビューを実施した。調査内容は、①“子どものために”と“保護者のために”という思いの間で葛藤を感じた事例、②葛藤事例における子ども・保護者、それぞれに対する思いと支援目標、③子育て支援に関する園のルールや方針、④子育て支援において感じる難しさの4点である。

葛藤は多くの場合、困惑や戸惑い、苛立ちとして、あるいは、自身の力量不足として認識され、必ずしも保育士自身が自覚しているとは限らない。そのため、葛藤事例の聞き取りは、必要に応じて柔軟に質問を投げかけながら進める必要性が高いと考えられた。そこで、対象者の語りに応じて柔軟に対応できる半構造化インタビューを実施した。

インタビュー調査の実施期間は2015年9月～2016年2月であり、3名のうち2名は勤務先保育所内、1名は筆者の研究室にて実施した。面接時間の平均は72分であった。また、インタビュー内容は許可を得てICレコーダーに録音した。インタビューの実施にあたっては、率直な思いを引き出すために自由な語りを重視し、価値判断を行わないよう留意するとともに、必要に応じて詳細を尋ねる質問を行った。

### 2. 分析方法

葛藤の様相を詳細に捉えるために、データ分析には大谷<sup>8)</sup>によるSteps for Coding and Theorization (以下、SCAT)を用いた。SCATとは、4ステップにより構成概念を抽出するコーディングと、構成概念を紡いでストーリーラインを作成する手続きからなる質的分析手法である。SCATにおけるコーディングの4ステップとは、①テキスト中の注目すべき語句の記入<sup>注3)</sup>、②抽出した語句の言い換え、③②を説明するようなテキスト外の概念の記入、④全体の文脈を考慮したテーマ・構成概念の記入である。分析ワークシートの一例を表2に示す。

表1 調査の概要

	年数	種別	設置主体	実施時期	時間	場所
A	20年	私立	社会福祉法人	2015年9月	79分	園内
B	20年	公立	市区町村	2015年9月	88分	研究室
C	6年	私立	社会福祉法人	2016年2月	50分	園内

表2 分析ワークシートの例

テキスト	< 1 > 注目すべき語句	< 2 > 語句の言い換え	< 3 > テキスト外の概念	< 4 > テーマ・構成概念
子どものことを考えると「もっとお休みして」と思うし、お母さんのことを考えると、子どもはここで預かってあげる方がお母さんのには幸せなのかなって。だからほんと子どもの幸せはどうなのか、お母さんの幸せはどっちなのかというのが。どっちも助けてあげたいなっていう感じがすね。	子どものことを考えると「もっとお休みして」、お母さんのことを考えると、子どもはここで預かってあげる方がお母さんのには幸せなのかな、子どもの幸せはどうなのか、お母さんの幸せはどっちなのか、どっちも助けてあげたい	子どものための願い、母親のための支援、子どもの幸福、母親の幸福、双方への支援	子ども尊重願望、保護者支援としての受入れ、親・子ウェルビーイング考慮、同時支援志向	相反意向の板挟み、ウェルビーイングの同時保障志向
やっぱり保育士側してみたら、お母さんよりもやっぱり子どものことの方が。だから……、もう少し家でお母さんと。とにかくお母さんに甘えさせてあげたいな。お母さんをもっと。とにかく甘えたいのがすごく分かったので、私たちじゃないよねって、やっぱりお母さんに甘えたいし、お母さんに甘えさせてあげたい、それをどう伝えるか。	お母さんよりもやっぱり子ども、私たちじゃないよねって、やっぱりお母さんに甘えたいし、お母さんに甘えさせてあげたい、それをどう伝えるか	子ども優先、代替できない母親役割、欲求充足への願い、伝わらない子どもの思い	子ども重視、代替不可能感、子どもニーズの実現要求、伝わらないニーズ	子ども優先願望、役割代替不可能感、子どもニーズ理解願望

SCATは質的研究法の中でも小規模データの分析に適しており、テキストの文脈を切り離すことなくデータと概念の往還により分析を行うことができる。さらに、分析プロセスが明示化されるため、その妥当性を吟味しつつ分析を進めることができる<sup>9)</sup>。本研究では全てのデータを統合して一般化を目指すことよりも、葛藤における保育士の意識構造を各事例の文脈とともに詳細に把握することを重視している。そのため、本研究では、1事例ごとの分析に適した手法として、SCATを採用した。

分析にあたっては、まず全てのインタビューデータから逐語録を作成した。このうち、葛藤事例に関するテキストデータを分析対象として、コーディングならびにストーリーラインの作成を行った(表3)。その後、葛藤における保育士の意識構造を検討するために、SCATによる分析から生成された構成概念のうち、3名の保育士の意識を抽出し、内容の類似性により類型化した(表4)。

SCATでは、理論記述の作成も分析手続きに含まれる。しかし、ここで生成される「理論」とは普遍的かつ一般化可能な原理のようなものではなく、あくまで小規模データから得られた個別的、具体的な結果である。SCATでは対象に関する記述的な理解に重点が置かれているため、理論記述を不要と考えてもよいとされている<sup>10)</sup>。このような理論記述の性質を踏まえ、本研究では、個々の事例の分析段階では理論記述を行わず、すべての事例分析を終えた後に、全体を通じた考察を加えることとした。

なお、分析対象事例には本研究の規定する葛藤と必ずしも一致しないものも含まれていたが、これを“保育士自身がとらえた葛藤”として分析を行うこととした。その理由は、先行研究のない現状では、子育て支援の困難状況において葛藤が生じる保育士と生じない保育士の意識の違いも含めて検討を行うことで、より多くの示唆が得られると考えたからである。

### 3. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、所属大学の研究倫理委員会の承認を得た(承認番号:2015-012)。ま



表 3 ストーリーライン

	①葛藤・困難状況 <sup>(注4)</sup>	②保育士の思いと対応
A	<p>2 歳児の子どもは、＜母親希求＞と＜愛情飢餓感＞を示し、家庭で過ごしたのに対して、保護者は＜疲労困憊感＞と＜子育てで苦手感＞から、＜意図的な保育最大利用＞を行っており、休日や勤務時間以外の保育利用を希望している。こうした子ども・保護者の＜相反意向の板挟み＞状況において、A 保育士は両者の＜ウェルビーイングの同時保障＞を志向しており、子どもと保護者のどちらを優先すべきか、＜優先順位判断の迷い＞による葛藤が生じている。</p>	<p>A 保育士は、＜子ども優先願望＞を抱くとともに、母親を強く求める子どもの姿から園での＜役割代替不可能感＞を感じ、子どもの意向を優先させたいと考ええる。しかし、保護者の日々の＜盲目的ケア要求＞から、A 保育士は＜生活課題認識＞と＜フラストレーション察知＞を行うとともに、＜背景理解にもとづく養育力把握＞にもとづき、保護者の意向を優先する必然性が高いと考える。しかし、保護者に対する＜子どもニーズ理解願望＞をもち続けており、＜試行錯誤による代弁＞により、子どもの家庭で過ごしたいという思いを、保護者に事あるごとに伝えていく。また、子育ての負担感を訴える保護者に、子育ての＜楽しさ実感願望＞を有している。園には、保護者の幸せが子どもの幸せにつながるという、＜親・子利益の一体性理念＞があり、こうした＜保育理念の後押し＞を受けて、このまま保護者の意向を受け入れることにする。しかし、保護者の＜意図的な保育最大利用＞が続く中で、子どもは休日にも家庭より園での生活を望むようになり、＜子ども意向の転換＞が生じる。その結果、保育利用に関する＜親・子意向の一致＞に至り、両者の＜相反意向の板挟み＞は解消されることとなる。しかし、A 保育士には、保護者に対する＜諦めによる園生活の優先化＞であると感じられたために、＜子ども利益判断のゆらぎ＞が生じ、葛藤が増大していた。</p>
B	<p>0 歳児の保護者の＜自己都合による保育最大利用＞が繰り返される状況において、B 保育士は＜託児感覚への苛立ち＞と＜私事優先の問題視＞を行っている。また、保護者の就労実態に関する＜事実隠蔽感＞と＜ルールなおざり感＞を感じており、保護者が意図的に＜戦略的遅刻＞を繰り返していると考えている。保護者の迎えの遅れにより、不安を示す子どもに対して、B 保育士は＜子どもへの不憫感＞と、保護者の＜子ども軽視への苛立ち＞を感じている。</p>	<p>迎え時間に不安を示す子どもに対して、B 保育士は＜不憫感による献身的保育＞を行う。また、保護者には＜子ども優先の当然視＞と＜“子どもの味方”意識＞にもとづき、＜“子どものため”の改善要求＞として、＜時間厳守徹底指導＞を繰り返す。B 保育士は、保護者の＜養育姿勢のポジティブ評価＞を行っており、同じ働く母親としての＜両立当事者としての部分的共感＞を示している。しかし、仕事以外の理由で迎えに遅れたり保育所を利用したりしていることから＜受容対象外認識＞を行っており、＜子ども優先要求＞を抱いている。B 保育士は、繰り返し指導を行っても、状況の改善が見込めないことにより＜指導不毛感＞を感じ、＜保護者変容への見切り＞をつける。そして、保護者への働きかけを中止し、子どもの保育だけに注力する＜支援対象の限定化＞に至っていた。</p>
C	<p>1 歳児の子どもの＜排泄自立欲求＞にもとづき、C 保育士は保護者に＜自立支援の提案＞と、用品準備の依頼を行う。子どもの意欲を踏まえ、保護者が用品を持参するまでの間、園の用品を貸し出し、排泄自立に向けた取り組みを先行して実施するとともに、保護者の＜子ども理解促進＞と＜喜びの共有化＞をめざして、その様子を伝えていく。保護者は＜消極的連携姿勢＞の中でようやく用品を持参するが、用品が不適切であったため、子どもは排泄の失敗により衣類を汚してしまう。その結果、保護者からの＜失敗による中止要求＞と＜協力拒否＞状況が生じる。子どもは意欲的に排泄の自立に取り組み、自立を喜んでいるが、保護者はこれまでの子育て経験による＜経緯的育児観＞から、＜自立支援不要感＞を有している。こうした保護者からの中止の要求により、排泄自立に向けた取り組みを継続することができず、葛藤が生じている。</p>	<p>この状況に対して、子どもの＜主体性尊重願望＞から、保護者に対する＜子ども理解願望＞と、子どもの発達や意欲に応じた＜子ども中心の連携願望＞を抱いている。しかし、保護者の意向を退けて、自身の願いを優先することは、保護者との関係悪化につながると考え、＜連携不全リスク回避＞のために、＜“子どものため”の関係構築＞を優先し、排泄の自立支援を中止する。その結果、子どもは＜中止による自立意欲の喪失＞から以前の姿に逆戻りし、C 保育士は＜発達後退の残念感＞を感じるとともに、保護者に対する＜配慮による子ども実態の見えにくさ＞があったことを感じ、＜連携不全の罪悪感＞を感じている。</p> <p>しかし、C 保育士は、このような判断の迷いや後悔は保育にネガティブな影響を及ぼすとの懸念から、意識的に葛藤の脱焦点化＞を行っている。また、子ども理解にもとづき、子どもが他児との関係の中で、再び排泄自立の意欲を取り戻すという＜子ども理解にもとづく発達の見通し＞を立て、＜子ども集団の意図的活用＞により＜意欲回復アプローチ＞を行うことにする。こうして、＜保育方法の工夫による発達保障＞の手立てを構想することにより、C 保育士は葛藤を解消していた。</p>

た、インタビュー調査にあたっては、研究倫理遵守に関する誓約書にもとづき口頭説明を行うとともに、書面により同意を得た。結果の記述においては、園や個人が特定される可能性のある情報を削除するとともに、プライバシーを考慮し、具体的な事例の概要やインタビューデータの引用は、結果の解釈に必要な最低限の内容にとどめた。

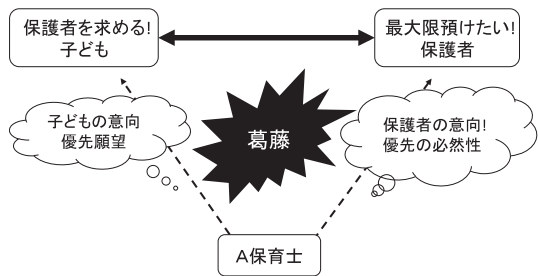


図1 A保育士の葛藤

### Ⅲ. 結果と考察

分析の結果、保育士の葛藤構造は図1～図3、SCATにより作成されたストーリーラインは表3の通りであった。以下、＜ ＞内はSCATにより生成された構成概念、「 」内は保育士の発話内容、( ) 内のアルファベットは該当保育士を示す。

#### 1. 各保育士の葛藤とその構造

A保育士ならびにC保育士には葛藤が生じているのに対して、B保育士は子育て支援が困難化していたものの、本研究の焦点化する葛藤は見られなかった。

A保育士ならびにC保育士の葛藤は、いずれも子どもと保護者の意向の対立状況、即ち、保育所利用(A)や排泄自立(C)をめぐる対立によってもたらされていた。いずれの事例においても、保育士は子どもの意向を優先させたいと考えているものの、母親の抱える生活課題(A)や連携の困難化リスク(C)を考慮すると、それができず、葛藤につながっていた。つまり、これらの葛藤は、子どもと保護者の意向の対立によって、子どもの最善の利益を保障しがたい状況において生じていると言える。

しかし、その後の経過においては、A保育士とC保育士の間に違いが見られる。A保育士は、「子どものことを考えると“もっとお休みして”と思う」が、「お母さんのことを考えると、子どもはここで預かってあげの方がお母さんのには幸せ」なのではないかと述べ、「子どもの幸せはどうか、お母さんの幸せはどちらなのか、どっちも助けてあげたい」との思いを語っている。そして、結果的には母親への支援を優先しつつも、「ここ(園)に来る方がこの子にとったら幸せなのか、お母さんと一緒にいることが幸せなのか」との思いをめぐらせており、卒園までこの葛藤が継続していた。

その一方で、C保育士は子どもの排泄自立のタイミングを「大人が決めるのではなくて、今の姿を分かってもらって一緒にやっていっていただけたら」と願いつつも、「お母さんの思いが私が変わえられなかった」ことについて、子どもに対する「後ろめたい気持ちがある」と述べている。しかし、「(排泄自立の達成に向けた)持って行き方というのはあると思う」と述べ、「(子どもは)自分をすごく持ってい

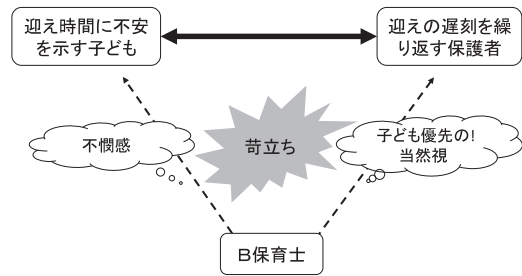


図2 B保育士の困難感

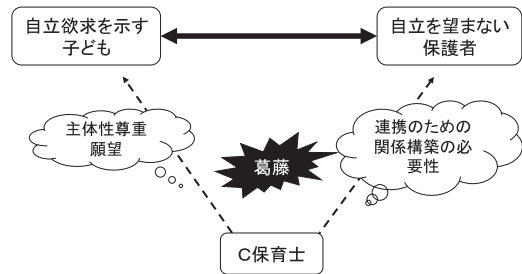


図3 C保育士の葛藤

るから、みんながオムツじゃなくなればプライドが許さない」との見通しをもっている。このような長期的な発達保障の構想により、C保育士は葛藤を解消していた。先行研究<sup>11)</sup>においては、子どもの最善の利益の判断における長期的視点の獲得が葛藤の解消につながるということが示唆されているが、C保育士の事例においても、同様の傾向が見出された。

以上の2名の保育士とは対照的に、B保育士は“子どものために”という思いの比重が高く、“子どものために”“保護者のために”という思いの対立による葛藤は見られなかった。B保育士は、保護者が子どもを軽視していると感じており、連日、仕事のない日も自己都合により迎えの遅刻を繰り返す保護者に対し、「すごくイライラする」と述べている。また、B保育士は保護者が「子どもをかわいがっている」と認識しつつも、目の前の子どもが軽視されているとの思いから、保護者に対する苛立ちを感じている。こうした状況に対して、“子どものために”との思いから、迎え時間を厳守するよう指導を繰り返すものの、改善の見込みがないことから保護者への働きかけを中止し、自らの職務を保育のみに限定している。松木<sup>12)</sup>は、保護者との関係構築に困難が生じた時、保育者が職業上の経験を安定化させるために、子どもとのかかわりにのみ職務を限定する傾向があることを指摘している。B保育士もまた、このような職務の限定化によって、子どもの保育に注力していた。

以上の通り、葛藤は子どもの最善の利益を保障しがたい状況において生じていた。しかし、こうした状況が必ずしも保育士の葛藤を引き起こすわけではなく、保護者への苛立ちや対応上の困難感として経験される場合もあることが明らかとなった。

## 2. 葛藤における保育士の意識構造

本研究の目的である葛藤における保育士の意識構造を明らかにするために、SCATにより生成された構成概念のうち、保育士の意識を抽出し、類型化を行った。その結果、保育士の意識は①専門職倫理意識、②母親規範意識の2つのカテゴリーに大別された。それぞれを構成するサブカテゴリー、構成概念ならびに語りの例を表4に示す。なお、＜ ＞はカテゴリー、【 】はサブカテゴリー、< >はSCAT分析により生成された構成概念を示している。

まず、＜専門職倫理意識＞は、【子ども理解の促進】【子育ての喜び実感支持】【子どもの思いの尊重】という3つのサブカテゴリーから構成され、葛藤が生じていたA保育士ならびにC保育士の語りに多く見られた。このうち、【子ども理解の促進】【子育ての喜び実感支持】は、保育指針や教育・保育要領の第4章に示される子育て支援の基本原則であり、保護者に対する専門職倫理としてとらえることができる<sup>13)</sup>。一方、【子どもの思いの尊重】は、保育指針や教育・保育要領における「子どもの主体性の尊重」、「子どもの主体としての願いや思いの受け止め」、「意欲の尊重」などに該当する保育の基本原則である。これらは、保育士が保育において守るべき事項であることから、子どもに対する専門職倫理であると考えられる。

以上のことから、子育て支援における＜専門職倫理意識＞は、保護者に対する専門職倫理意識と、子どもに対する専門職倫理意識の2側面から構成されるものであると考えられる。本研究における葛藤は“子どものために”“保護者のために”という思いの間で生じるものであり、この葛藤は専門職倫理意識にもとづく実践において生じていた。このことから、子育て支援の葛藤は、子どもに対する専門職倫理と、保護者に対する専門職倫理の対立によって生じている可能性が考えられる。

一方、＜母親規範意識＞は【母親役割期待】から構成され、葛藤が生じていないB保育士の語りに多く見られた。母親規範意識とは「母親ならば～すべき」という意識である。これは、「母親ならば子どもを最優先に考えるべき」「母親ならば子どもに献身的であるべき」との思いが基盤にあり、期待する

表 4 葛藤における保育士の意識

カテゴリー	サブ カテゴリー	構成概念	語り
《専門職倫理意識》	【子ども理解の促進】	〈子どもニーズ理解願望〉 〈子ども理解願望〉	「その子その子に、年齢とかではなく、その子がやりたいと思う時期が各自違っている。それを大人が決めるのではなくて、今の姿を（保護者に）分かってもらって、一緒にやっていただけたら [C]」「（子どもが求めているのは）私たちじゃない。やっぱりお母さんに甘えたいし、お母さんに甘えさせてあげたい。それをどう伝えるか [A]」
	【子育ての喜び実感支持】	〈楽しさ実感願望〉	「子どもとのやり取りが楽しいと感じてもらえたら [A]」
	【子どもの 思いの尊重】	〈子ども優先願望〉〈主体性 尊重願望〉〈発達後退の残 念感〉〈連携不全の罪悪感〉 〈“子どもの味方”意識〉 〈子ども中心の連携願望〉	「お母さんよりもやっぱり子ども（を優先したい）[A]」「せっかくやる気になっていたところに、オムツを履くようなことが続いたので（中略）意欲的ではなくって、すごい残念。やっぱり、やりたい時にやらしてあげたい [C]」「お母さんの思いを私に変えられなかったという後ろめたい気持ちがある。（トイレで排泄をしなくなったのは）その子には関係（責任は）ない [C]」「子どもの味方、子どもの代弁者として話すことはもちろんあった [B]」「（子どもの思いの実現のために、保護者に）一緒にやっていただけたら [C]」
《母親規範意識》	【母親役割期待】	〈子ども優先の当然視〉〈子ども優先要求〉〈子ども軽視への苛立ち〉〈託児感覚への苛立ち〉〈受容対象外認識〉〈私事優先の問題視〉 〈子どもへの不憫感〉	「子どもが一番 [B]」「“子どもも（時間が）分からないからってズル（休日に預けたり終業後も私事を済ませてから迎えにくること）をする [B]」「（気軽に預けることに対して）すごくイライラする [B]」「仕事だったら“仕事しているから大変なんだよね”って言えるけど（休みの日に預けているのでそうは思えない）[B]」「その時間（迎えの時間）に合わせて（仕事後に）家に帰って料理をしてっていうことも [B]」「不安そうにしているのを見るとかわいそう [B]」

( ) 内は筆者による補足, [ ] 内のアルファベットは保育士を示す

母親役割が遂行されていない状況への苛立ちや、子どもへの不憫感を伴うものである。このような意識は、専門職としての価値観ではなく、保育士の個人的価値観によるものである。

本研究では“子どものために”“保護者のために”という思いの対立状況を想定していたが、母親規範意識にもとづく実践では、葛藤が生じていなかった。その理由として、母親規範意識のもとでは、“子どものために”という思いの比重が高いために、“保護者のために”という思いとの対立に至らなかったことが考えられる。しかし、先行研究<sup>14)</sup>においては、保育士が内心では母親規範意識にもとづく様々な要求を保持しながらも、子育て支援という自らの職務を自覚しているためにそれを伝えることができず、葛藤するケースが見出された。これは、母親規範意識にもとづく“子どものため”と、専門職倫理意識にもとづく“保護者のため”という思いの間で生じる葛藤である。このことを踏まえると、葛藤には専門職倫理の対立によるものだけでなく、専門職倫理と母親規範意識の対立によるものも存在すると考えられる。

以上のように、3名の保育士はいずれも“子どものために”との思いにもとづき子育て支援を行っていたが、その背後には専門職倫理意識、母親規範意識という2つの異なる意識があることが明らかとなった。



#### IV. 総合考察

以下では、本研究の結果を踏まえ、子育て支援における保育士の意識と葛藤との関係について検討を行うとともに、葛藤の解決にむけた課題について考察する。

##### 1. 専門職倫理の対立による葛藤とその課題

専門職倫理とは、専門職の価値を実現するための現実的な約束事やルール の体系であり<sup>15)</sup>、専門職としての適切な行動の基準を示した行動規範（責任、義務）を示している<sup>16)</sup>。保育の価値を子どもの最善の利益ととらえると<sup>17)</sup>、専門職倫理はそれを実現するために保育士が守るべき行動規範であると言える。専門職倫理は専門職としてなすべき行為の基準として、すべての保育士が共有すべき事項であり、これを根拠とすることで、保育士の個人的な感情や価値観に左右されず、どの子どもにも保護者にも公平かつ適切な判断を行うことができる。それだけでなく、専門職倫理にもとづく実践は、保育士の価値判断にも正当性を与えることとなる。

前述の通り、保育士は保育と子育て支援という2つの職務を有していることから、子どもと保護者、それぞれに対する倫理的責任が生じることとなる。そのために、子どもと保護者のニーズが対立した際、専門職倫理にもとづき子育て支援を行おうとすれば、子どもに対する倫理的責任と保護者に対する倫理的責任の間で板挟みとなる。A保育士やC保育士の葛藤は、このような子ども・保護者それぞれに対する倫理的責任の対立により生じていると考えられる。A保育士は母親の養育課題を把握しており、長時間保育の必要性を認識しているものの、家庭で過ごしたがっている子どもの意向も尊重したいとの思いから、葛藤を抱えている。また、C保育士は、意欲的に排泄の自立に向かう子どもの主体性を尊重したいと願いつつも、これを優先すれば、それを望まない保護者との協働関係にリスクが生じるために、葛藤が生じている。

これらは、いずれの選択肢にも倫理的根拠が存在することから、倫理的ジレンマと呼ばれる専門職としての葛藤であると考えられる。倫理的ジレンマにおいては、一方を選択すればもう一方の実現は困難となるために、その判断には大きな困難が伴うこととなる<sup>18)</sup>。保育士は職務の二重性を有することから、子育て支援にはこのような問題が生じやすい。そうした中で、どのように子どもに対する倫理的責任を果たしていくのかを考えていく必要がある。

保育指針第1章総則1（1）には、保育士の専門的判断は「子どもの最善の利益を尊重することをはじめとした児童福祉の理念に基づく倫理観に裏付けられたものでなくてはならない」と明記されている<sup>19)</sup>。また、葛藤への対応においては、倫理的根拠を明らかにするとともに、支援の結果が子どもや保護者に与える影響を十分に検討した上で、選択・決定していく必要性が指摘されている<sup>20) 21)</sup>。倫理的ジレンマにおいては、このように専門職倫理にもとづく判断を行うことで、どちらを選択したとしても倫理的にはその正当性が付与されることとなる。しかしながら、そのような意思決定には次のような課題がある。

第1に、保育士の専門職倫理は全国保育士会倫理綱領（以下、倫理綱領）として明文化されているが、ここでは子どもと保護者のそれぞれに対する倫理的責任が必ずしも明確化されていない。そのために、倫理的ジレンマが生じたとき、保育士が子ども・保護者それぞれに対して、どのような倫理的責任があるのかを確認することが難しい。第2に、専門職倫理が実際の個別・具体的な実践に活用できるほど、具体化されていない。倫理綱領に示される8つの倫理は包括的である反面、抽象度が高く実際の行動として何をすべきか、あるいはすべきでないのかが明記されていない。そのために、倫理的ジレンマに



において、子どもと保護者、それぞれに対してどのような行動をとるべきか、倫理綱領をもとに判断することが難しい。社会福祉士には、倫理綱領に示される倫理基準が実践上の行動の水準において具体化され、「社会福祉士の行動規範」として定められている。また、ここでは誰に対する行動規範であるのかも明確である。葛藤の解決には、保育士にもこのような具体的な行動基準が必要である。

以上のように、倫理的ジレンマの解決には、子どもと保護者それぞれに対する倫理的責任と、それぞれに対する具体的な行動基準の明確化が必要である。その上で、子育て支援の意思決定において、子どもの最善の利益を最大限に確保するためのしくみを構築する必要があると考える。

## 2. 母親規範意識にもとづく子育て支援とその課題

母親規範意識は、母親の生理的特性としての母性や母性愛を根拠として、母親による子育てが子どもにとってもっともよいとする規範であり<sup>22)</sup>、子どものための自己犠牲や自己献身を愛情の証とする母性観に立脚している<sup>23)</sup>。本研究では、このような母親規範意識にもとづく実践には、葛藤が生じていなかった。

B保育士は母親が子どもをかわいがっていることを認めつつも、私事を優先させたり、迎えに遅れたりする姿に苛立ちを感じていた。この背後には、「母親ならば、子どものことを何よりも優先すべき」といった、母親に対する役割期待があると考えられる。しかし、このような意識はB保育士だけでなく、多くの保育士に共通して見られるものと考えられる。先行研究では、保育士の母親規範意識が保護者より高いことが明らかにされている<sup>24)</sup>。また、これに反して母親自身の母親規範意識は弱まっており、母性愛や自己犠牲を否定することを規範からの逸脱とみなす意識も薄れつつあることが指摘されている<sup>25) 26)</sup>。これらの研究からは、母親規範意識が薄れつつある保護者と、依然として母親規範意識の高い保育士の間に、子育てに対する意識のズレが生じていることがうかがえる。

保育士が母親規範意識にもとづき子育て支援を行うとき、母親に対する受容や自己決定の尊重は難しく、一人ひとりの子育ての実情にかかわらず、あるべき母親像を基準とした母親役割を母親に求めてしまう可能性がある。中谷<sup>27)</sup>は、母親規範意識を内面化している母親は保育士<sup>注5)</sup>の母親規範意識を敏感に感じ取り、それに同調する傾向があること、またその影響力は保育士の支援観よりも大きく、母親のエンパワメントを阻害するおそれがあると指摘している。子育て支援が母親規範意識にもとづいて行われるとき、子育ての責任は母親にあることが強調され、母親には子どものための自己犠牲や自己献身が求められる。その結果、子育て支援によって子育ての負担感が高まり、子育てがより困難となるおそれがある。しかし、母親規範意識もまた“子どものため”という意識と一体となっていることから、子どもの最善の利益の実現のための専門的価値観と混同されやすく、このような違いを保育士自身が自覚することは難しいと考えられる。

このような問題は、専門職倫理が十分に内面化されていないことから生じる問題である。保育士がそれぞれに独自の価値観にもとづき実践を行っても、必ずしも子どもの最善の利益を確保できるとは限らない。またそうした実践においては、保育士間での価値観のズレが生じやすく、園全体で子どもの育ちや保護者の子育てを支えていくことは困難である。しかしながら、多くの場合、個人的価値観は自覚されにくく、社会の中で形成された規範を無自覚のまま内面化していることが少なくない。そのため、保育士自身がもつ個人的価値観やそれが相手に与える影響について、また専門職としてもつべき専門的価値観について学習していく必要があると考えられる。しかし、現状では保育士の養成教育においても現職教育<sup>28)</sup>においても、このような学習の機会はほとんど保障されていない。保育士の倫理的感受性の低さも指摘されていることから<sup>29)</sup>、子育て支援において子どもの最善の利益を確保するためには、保育

士の倫理教育についても検討が必要である。

## V. まとめと今後の課題

本研究では、保育士の語りの質的分析を通して、子育て支援の葛藤における意識構造について検討を行った。その結果、第1に保育士の子育て支援の背後には、専門職倫理意識と母親規範意識という2つの異なる意識があることが明らかとなった。また、専門職倫理意識にもとづく実践には葛藤が生じており、母親規範意識にもとづく実践には葛藤が生じていなかった。第2に、本研究における葛藤はいずれも、子どもと保護者、それぞれに対する倫理的責任の対立から生じる倫理的ジレンマであり、その解決には保育士の専門職倫理の具体化が必要であると考えられた。第3に、保育士の母親規範意識は子育てを困難化させるおそれがあり、その自覚化や専門職倫理の内面化のための倫理教育が必要であることが示唆された。

これらの研究成果は、少数データの分析によるものであり、データの追加によって新たな知見が見出される可能性がある。この点が本研究の限界である。そこで、今後の課題として、量的調査によるデータ収集を行い、子育て支援における保育士の意識構造をより詳細に分析することが必要である。さらに、葛藤の解決にむけて、専門職倫理にもとづく意思決定のしくみの検討も必要であろう。

### 注

注1) 保護者に対する保育に関する指導は児童福祉法に規定される保育士の職務であることから、同法に規定される18歳未満の児童の保護者がその対象となる。本研究では、保育所に入所する乳幼児の保護者を対象とした支援に焦点化することから、保育所保育指針ならびに幼保連携型認定こども園教育・保育要領にあわせて「子育て支援」という用語を用いることとする。

注2) A保育士については、引用文献3) で用いたデータを使用している。この研究では、葛藤構造の把握を目的としているが、本稿では葛藤における保育士の意識に焦点化し、異なる視点から再分析を行っている。

注3) 「テキスト中の注目すべき語句の記入」とはSCATのコーディングの手続きの一つである。本研究では、保育士の葛藤およびその意識構造を検討するために、①葛藤の背景要因、②保育士の思い、③対応の3つの観点から注目すべき語句を抽出した。

注4) 分析の結果、B保育士には葛藤が生じていなかったため、表中では、「葛藤・困難状況」と表記している。

注5) この調査の回答者は、95.1%が保育士である。

### 引用文献

- 1) 亀崎美沙子 (2018) 保育の専門性を生かした子育て支援—「子どもの最善の利益」をめざして。わかば社。25
- 2) 木曾陽子 (2011) 「気になる子ども」の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス—保育士の語りの質的分析より—。保育学研究。49 (2)。84-95
- 3) 亀崎美沙子 (2017) 保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤—親・子の相反ニーズにおける子どもの最善の利益をめぐる—。保育学研究。55 (1)。68-79

- 4) 木曾陽子 (2016) 発達障害の可能性がある子どもの保護者支援. 晃洋書房
- 5) 前掲, 3)
- 6) 亀崎美沙子 (2017) 保育相談支援における保育士の葛藤—「気になる子ども」の保護者との関係変容に伴う支援の質的転換に着目して—. 十文字学園女子大学紀要, 47, 37-48
- 7) 亀崎美沙子 (2019) 子育て支援における保育士の葛藤—保育経験を有する園長の語りの質的分析から—. 十文字学園女子大学紀要, 49, 27-36
- 8) 大谷尚 (2011) 明示の手続きで着しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学, 10 (3), 155-160
- 9) 同上
- 10) 大谷尚 (2008) 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54 (2), 27-44
- 11) 前掲, 7)
- 12) 松木洋人 (2007) 子育てを支援することのジレンマとその回避技法—支援提供者の活動における「限定性」をめぐって—. 家族社会学研究, 19 (1), 18-29
- 13) 亀崎美沙子 (2019) 子育て支援における専門職倫理の検討—「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を手がかりに—. 日本保育学会第72回大会発表論文集, P-655-P-656
- 14) 前掲, 6)
- 15) 小山隆 (2003) 福祉専門職に求められる倫理とその明文化. 月刊福祉, 86 (11), 16-19
- 16) 鶴宏史 (2018) 第2章 保育ソーシャルワークにおける価値と倫理. 日本保育ソーシャルワーク学会編, 改訂版保育ソーシャルワークの世界—理論と実践—. 晃洋書房, 11-20
- 17) 同上
- 18) 高良麻子 (2015) 第7章 専門職倫理と倫理的ジレンマ. 社会福祉士養成講座編集委員会編, 新・社会福祉士養成講座6 相談援助の基盤と専門職 (第3版), 中央法規, 150
- 19) 厚生労働省編 (2018) 保育所保育指針解説. フレーベル館, 17
- 20) 前掲, 1), 84-96
- 21) 前掲, 16)
- 22) 井上清美 (2013) 現代日本の母親規範と自己アイデンティティ. 風間書房, i
- 23) 大日向雅美 (1988) 母性の研究—その形成と変容の過程: 伝統的母性観への反証—. 川島書店, 57
- 24) 神田直子・戸田有一他 (2007) 保育園ではぐくまれる共同的育児観—同じ園の保育者と父母の育児観の相関から—. 保育学研究, 45 (2), 146-156
- 25) 前掲, 23)
- 26) 工藤遥 (2018) 「子育ての社会化」施策としての一時保育の利用にみる母親規範意識の複層性. 福祉社会学研究, 15, 115-138
- 27) 中谷奈津子 (2014) 地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化. 保育学研究, 52 (3), 9-21
- 28) 厚生労働省 (2016) 調査研究協力者会議における議論の最終取りまとめ—保育士のキャリアパスに係る研修体系等の構築について— (参考資料). 平成28年12月19日
- 29) 谷川友美 (2013) 保育実践における倫理—倫理的な保育実践システムの構築を目指して—. 別府大学期大学部紀要, 32, 51-60

## 謝辞

ご多忙の中、インタビュー調査にご協力いただきました先生方に、深く感謝申し上げます。また、神戸大学の中谷奈津子先生には、ご多忙の中、貴重なご助言を賜りました。ここに記して、御礼申し上げます。

## 付記

本研究は、JSPS科研費JP18K13121の助成を受けて行った。また、本研究の一部は第19回日本子ども家庭福祉学会全国大会において発表している。なお、葛藤事例は以下の研究で用いたデータを再分析したものである。

- ・ 亀崎美沙子（2016）「保育相談支援における保育士のジレンマ（1）」『日本保育学会第69回大会発表要旨集』 p.383
- ・ 亀崎美沙子（2017）「保育相談支援における保育士のジレンマ（4）—子どもの発達保障と保護者意向の尊重をめぐる—」『日本保育者養成教育学会第1回研究大会プログラム・抄録集』 p.144
- ・ 亀崎美沙子（2017）「保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤—親・子の相反ニーズにおける子どもの最善の利益をめぐる—」『保育学研究』 55（1）， pp.68-79

